

……大陸に覇を唱えんとする大国ルナリアにて、その事件が起こったのは寒い冬のことであった。

ルナリア国内にて生命に関する研究と探求を続ける錬金術師たちの集団〈新たなる種の起源〉が、何者かの襲撃を受けたのだ。所属していた錬金術師、合わせて四八名は全員が殺害され死亡。その大半の者に残忍で激しい拷問の痕が確認された。

事件の調査を担当したルナリアの見解によると、この事件はルナリアと敵対関係にある隣国のレーゲンドラの仕業であるとされた。犯行の動機は、〈新たなる種の起源〉の研究成果を強奪するため。むろん、レーゲンドラは即座に否定し、独自の調査団を派遣しようとした。だが、ルナリアは自国内での犯行であることを理由にこれを拒否。双方の見解の違いは非難の応酬へと発展し、やがて両国は戦端を開くことへとつながっていく。その間に事件はうやむやとなっていた。

では、真実はどうであったのか。

実は、〈新たなる種の起源〉を襲撃したのはルナリアの刺客たちであった。犯行の動機と理由は、軍事力増強のため。〈新たなる種の起源〉が誕生させたという「究極の錬金生物」を手に入れようとしたのだ。

しかし、ルナリアの襲撃を事前に察知していた〈新たなる種の起源〉は、ルナリアの刺客が自分たちの本拠地にやってくる前に「究極の錬金生物」を野に逃がしており、ルナリアの目論見は失敗に終わった。刺客たちは錬金術師たちに激しい拷問を加えて錬金生物の行方を追及したが、錬金術師たちは誰ひとりとして口を割らず、大量の血を流しながら死んでいった。

ルナリアの刺客に襲われる直前、錬金術師たちは野に放つ錬金生物にひとつの使命を託していた。

「人間は邪悪な生き物だ。この世に存在してはならない種族だ。殺せ。絶滅させる。それがダメなら、獣以下に墜せ。この星のために、他の全ての生物・種族のために、人間を超越する新たな種を繁栄させるのだ！ おまえはそのために生みだされた〈神〉なのだから……」

……かくして、ルナリアとレーグンドラの戦いが激しさを増す一方で、悪意が静かにルナリアを蝕もうとしていることに、人々は気づかなかった……。

\*

……どこからともなく吹いてきたその生暖かい風が娘の頬を撫でた時、閉じていた彼女の眼が二度、三度と痙攣した。

「……ここは、どこなの……？」

無意識のうちに発せられた問いかけに対する返答はなかった。そのため、彼女——ベロニカは、失っていた意識を取り戻してしばらくした後、自分が何処か薄暗い場所に連れてこられ、自由を奪われていることを自ら認識し、確認せざるを得なかった。

両の手足が鉄の枷と鎖によって拘束されている。試しに手と足に力を込めてみたが、鎖はびくともせず、ジャラジャラと不快な音を奏でるだけであった。また、腰に帯びていた剣も奪われており、身につけていたはずの甲冑もいつの間にか剥ぎ取られていた。薄い肌着だけが、辛うじて彼女の柔肌を覆い隠しているにすぎない。

自分の現状が、あまり好ましくない状況であることを確認したベロニカであったが、そのことで取り乱したりはしなかった。騎士である彼女は厳しい鍛錬によって不屈に近い精神を有しており、この程度の異常事態で動じたりはしなかったのだ。そう、この程度の異常事態では。

「……えっと、いったい何があったんだっけ」

気を失うまでの記憶が定かではなかったため、遡って思い出そうと試みる。それは内心

の奥底へと釣り糸を垂らし、記憶という魚を釣り上げる作業に似ていた。

意識を失う前、ベロニカは、ルナリア軍偵察部隊の一員として、レーゲンドラ軍に対する偵察任務を遂行している最中だった。

ルナリアの宣戦布告によって端を発したレーゲンドラとの戦いは、当初、万全の準備を整えていたルナリアの有利に進んでいた。だが、レーゲンドラが実施した一大反攻作戦により、ルナリアは大損害を被る。レーゲンドラ国内に攻め入っていた三〇万の侵攻軍がレーゲンドラ軍の四方からの挟撃によって撃滅されたのだ。勢いにのったレーゲンドラはそのまま軍を西へと進め、ルナリア国内への侵入を開始。一挙に国境付近の城塞都市を三つも落とし、ルナリアはたちまち苦境に陥った。

この非常事態に、ルナリアは、国軍の大半を結集して決戦を挑む決意を固める。ベロニカの部隊は決戦に備えてレーゲンドラ軍の動向を探る任務についており、その最中、何モノかの攻撃を受け、意識を失ったのだった。

「……そう、私はレーゲンドラ軍の動向を探っている最中だった。ということは、これはレーゲンドラ軍の仕業？」

「違うわ」

ベロニカが声に出して言葉を口にした直後だった。闇の奥から、氷のように冷たい声がそれを否定した。

「！ 誰なの！」

とっさに声を上げるベロニカ。緊張の度合いが一気に高まる。

「何者なの！？ 姿を見せなさいッ！」

さらに追求の声を上げる。内心の動揺が声に現れている。それは落ち着いていた心が泡だっている証拠だった。

ベロニカの追求に対して、闇の奥から返答の言葉が帰ってきた。温かみが一切感じられない冷たい声で。

「そう大きな声を出さないで、うるさいから。うるさいのはキライ」

そうやって、闇の奥から声の主が姿を現した。

ベロニカの緊張が一瞬だけ和らいだようにみえた理由は、声の主が、顔にまだあどけなさが残る少女だったからだろうか。

黒衣のローブを身にまとったその少女は、美しい顔立ちをしていたが、どこか儂く、弱々しく、それでいて病的なまでに色が薄く、繊弱そうな姿をしていた。

「……………誰なの、あなた？」

「エクリア。そう呼ばれてた」

「あなたが私をここに連れてきたの？」

「そう」

「なんのために？」

「実験するため」

ベロニカは、一瞬、自分が聞き間違えたのではないかと錯覚した。

「……………え、いま、なんて……………」

エクリアと名乗った少女が、ほんのわずかに首を傾げる。

「？ 聞こえなかったの？ なら、もう一度いうね。あなたをここへ連れてきた理由は、実験するため。実験の材料としてあなたを連れてきた」

「な……………！ あなた、自分がなにを言っているかわかってるのッ！？」

一瞬言葉に詰まった後、思わず声を荒げるベロニカ。動揺と、緊張と、そして若干の恐怖とが、彼女の感情を高ぶらせたのだ。

しかし、怒鳴られても、エクリアは動じていない。相変わらず無表情のまま、ベロニカを見つめている。放つ声も無情そのもので、機械仕掛けの人形に近いモノが感じられる。

「わかってる。実験の材料は新鮮じゃないとダメ。生きてないとダメなの。だからあなたは生かしたまま連れてきた」

「な、なんのために……………」

「？ だから実験のため」

「……ツツツ！ だから、その実験って——」

「交配実験」

少女が告げた。

「人間の雌に異生物を孕ませる実験。もう下準備はできている。後はそれを実験で実証するだけ。失敗が続いていたけど、今度こそ上手くいくはず。新たな種で、この世界を満たすために」

そう言っ、エクリアがパチンと指を鳴らした。その直後だった。少女の後ろから——闇の奥から、無数の触手が姿を現したのだ。赤黒い、歪な形をした、半透明色のぬらぬらとした薄気味悪い液体で濡れている、おぞましい触手の群れが、ベロニカに向かって伸びてくる。

「ひっ、な、なに、なんなのッ！」

ベロニカの表情が恐怖でひきつる。騎士として、不屈に近い精神を有する彼女だが、それはあくまでも平常時に限ったことであり、このような異常事態は鍛錬や訓練の想定外である。怯えが募り、逃げ出そうとするが、両手足を拘束している枷と鎖がそれを許さない。ベロニカの悲鳴と、鎖の音が重なり合った瞬間、触手がベロニカの身体にゆっくりと巻きついた。

「イヤッ、なに、なんなのッ！？ き、気持ち悪いツツツ！」

ベロニカが悲鳴をあげる。触手たちの、なんともいえないおぞましく、不快な感触が、露出していた部分の肌から伝い、彼女の脳に吐き気をもたらすような感覚を伝達する。それはベロニカが体感する初めての感覚だった。

「いやああああッ！ な、なんなの、これはッ！」

触手の群れがベロニカの身体に巻きつき、まさぐる。ねっとりとした粘液をその柔肌に塗りたくりながら、腕を、足を、首筋を、顔を、そして——。

「ッ！ は、入ってこないでッ！！！」

触手の一部が、ベロニカの身体をさらに蹂躪しようと、まさぐりながら、中へ中へと、

奥へ奥へと入ってくる。すでに衣服は触手の粘液物質でぐちよぐちよに濡れており、肌張り付いて不快な感触を生み出していたが、それも長いことではなかった。

ビリッ、ビリリリリリリッ！

布地が裂ける音がして、ベロニカの衣服がズタズタにされる。引き千切られ、破かれて、布地に隠されていた部分が露わになった。

まるで真珠のように白く美しい肌はもちろんのこと、小ぶりだが形のよい乳房や、新鮮な桃のような尻、それにほんのわずかな毛しか生えていない愛らしい秘部が、直接、空気にさらされ、白日の下にさらされた。

その瞬間、ベロニカの理性が音を立てて引き千切れた。

「い、いやあああああああッッッ！」

ベロニカが叫び声をあげる。それはまさに絹を裂くような声であった。恐慌、否、大恐慌といえる。理解を超えた多大な恐怖と、混乱と、羞恥心が入り乱れて、ベロニカの心は平常心を失い、大恐慌に陥ったのだ。

「いやあああああ、やめてッ、いやッ、いやあああああああッ！」

叫喚が闇の中に響き渡る。ぐちよぐちよという歪で不快な異音も同時に。

触手の呪縛から逃れようと、ベロニカが叫び声を上げながら手足をバタつかせる。もがきまわる。しかし、彼女を拘束している鎖と、彼女の身体に巻きついた触手たちが、それを許さない。自由を奪い、その肉体を食るように絡みつき、絞めあげ、包み込む。鍛えられてはいるが華奢な手足は先端にいたるまで、小ぶりの乳房はツンと尖った薄桃色の乳首の上にいたるまで、肉づきのよい尻の間はもちろんのこと、細い首筋も、くびれがある腰も、絵画に描かれる天使のような背中にいたるまで——全身にありとあらゆる部分を触手たちが這いずりまわり、穢してゆく。細部にいたるまで粘液で濡れたその姿は、さながら肉の海で溺れているかのようにだった。

「いやあああッ、お願いッ、やめて……ッ、イヤッ、いやあああああッ！」

拒否と拒絶の叫び声をあげながら、なんとかこの状況から逃れようともがき苦しむベロ

ニカ。その姿をエクリアがじっと見つめている。いや、観察していると言った方が正しいかもしれない。もしくは、ただただ視線を送っているだけか。いずれにせよ、ベロニカの現状に対して、その元凶であるエクリアが同情めいた気持ちを抱いていないことだけは確かだった。

舌を打つ音がした。それは気分を害されたことに対する憤りだったのかもしれないが、表面上、エクリアの表情には変化がみられなかった。

ただひと言、告げただけだ。

「うるさい、静かにして」

そう言つてエクリアが、まるで象牙細工のような芸術的なまでに白く細い指を動かした。その動きに応じるかのようにして、ベロニカの身体に絡みつく触手たちが新たな動きを開始する。理性を失い、本能赴くまま叫び続けるベロニカの口めがけて、無数の触手たちが殺到したのだ。

「——ツツツ！ ツツウツ！」

叫び声は一瞬にしてぐもった音に変質した。

ベロニカの口腔内が一瞬にして触手たちで満たされた。太い触手が一本、細い触手が三本、口の中で蠢き、暴れている。舌に絡みつき、歯茎の間を往来し、その口の中で、相手の気持ちなど考えることなくうねりまくる。

「うぶツ、こぶうツ、ぐぶうううツ！」

肺から空気が外へと出ようとすると、声ではなく、ゴボゴボと、泡立つ気泡が弾けるような音が連続する。ベロニカの口腔内は、触手の粘液と、分泌される彼女自身の唾液とによって、さながら洪水となっており、その液体類は、口の隙間だけでなく、逆流して鼻からも溢れつつあるようだった。

「…………ツ、…………ツツツ！」

半透明の液体類が、口と鼻からダラダラと零れ落ち、そのまま顔を濡らし、身体を汚してゆく。もはや窒息寸前なのだろうか。ベロニカの顔の色は白から赤へと変色しつつあり、

その瞳も、黒い部分が上部へと移動し、白い部分が大半を占めるようになっていた。限界か。この状況を目にすれば誰もがそう思うだろう。だが、ベロニカを襲う苦しみは、まだこれで終わりではなかったのである。

「まだよ」

冷酷な声がベロニカの鼓膜を震わせた。

「まだ足りない。もつとよ。もつと、もつと、もつと」

「——ッッ！」

これ以上、まだ何をするつもりなのか——すぐにわかった。

口腔内で蠢いていた触手のうちの一本——一番太い触手——が、さらに奥へと、ベロニカの体内への進行を開始したのだ。